



通学路に出て子ども見守る



約3キロの道のりを歩いて出迎え一緒に帰る隊員

地域の子どものを守るため、東自治振興区は昨年4月から、「地域安全見守り隊」を自治会単位で組織して、子どもたちの登下校時に「見守り活動」を展開しています。

平成17年11月に発生した広島市矢野西小の女児殺害事件や同年12月に発生した栃木県日光市の女児殺害事件などをきっかけに、振興区の総務部を中心に「地域

の子どものは地域みんなで守り育てていこう」という機運が高まりました。総会での提案に、「子どもの安全は親が守るべき」「見守り隊は良いことだが、義務として押し付けられるとしない」との意見が出ましたが、「事情はそれぞれあるが、区民一人ひとりができる方法を考えてみよう」と、14全ての自治会で組織づくりが始まりました。

自治会単位で地域安全見守り隊

東自治振興区

の隊員ができる方法で活動に取り組んでいます。

「以前は知らない人には声をかけてはいけないという雰囲気だったが、今では顔見知りになり、子どもたちがよく挨拶をしてくれるようになってうれしい」と話しています。

見守り隊員に144人が登録。その中心は65歳から80歳と高齢者が多い。また、見守り隊員の固定化など、活動が1年経過し、新たな課題も出てきました。

隊員の岡本義雄さんは「地域で子どもを守ろうと、観念では分かっているけど実践できていないのが大半。その中で1年間継続し、活動が2年目に入ったことは区民の自信になる。勤めや諸般の事情で参加できない人もいるが、自分のできる範囲内で、たとえば月1回



庄原警察署長から林正勝美区長へ感謝状が手渡される

や2カ月に1回でもいい。畑仕事をしながら、子どもたちの帰りを気にかけるのもいい。特定の人にまかせて見て見ぬふりをするのではなく、具体的な行動を起こすことが大事」と、継続の大切さを訴えています。この取り組みが評価され、5月10日には庄原警察署長から東自治振興区へ感謝状が贈られました。

特集 2

守りたい! 子どもの安全



「無事に元気で育ってほしい!」「子どもは地域の宝!」。子どもの安全は、家族はもちろん地域の切実な願いです。その一方で、何の罪もない子どもたちが巻き込まれる事件や事故が全国各地で相次いでいます。

子どもの安全を守る地域の活動を通して、一人ひとりができることを考えてみましょう。

危険個所に横断旗を設置

口和地区民生児童委員協議会



交通安全協会口和分会も協力して設置

口和地区民生児童委員協議会（横田三郎会長・11人）が4月25日、児童たちが道路を横断する際に使う黄色の横断旗と旗立てを、通学路の交差点など15カ所に設置しました。

中国横断道尾道松江線の工事車両などが多くなることや、バイパスや道路改良で交通量が増え、危険な個所が多くなったことから計画。



新しい横断旗を喜ぶ子どもたち

委員たちは、台風や老朽化で横断旗が破損したり、なくなったりしている個所を事前に調査しました。また、児童らの安全確保のため横断旗が必要と判断した個所に手作りの旗立てを新設し、地元企業や団体から寄付してもらった50本の横断旗を配置しました。

横田三郎会長は「子どもに登下校の安全をどのようを守るかが協議会で問題になったが、私たちが見守るにも人数が足りないため、私たちがやれることは何かを考え今回の活動になった。この活動を機会に、子どもへの安全について地域の人も関心を高めてほしい」と話していました。

登下校の安全を守る マスコット

備北商工会女性部高野支部



高野小の1年生と部員

備北商工会女性部高野支部（藤元咲枝部長・29人）が4月17日、高野地区の新1年生14人に交通安全マスコットをプレゼントしました。

部員が子どもたちの登下校の安全を祈って、赤い布に綿を詰めてサルの形に縫った手作りのマスコット。山口県の商工会女性部との交流でこの活動を知り、昭和59年から

毎年、小学1年生にプレゼントしています。この日は、部員を代表して3人が高野小学校を訪ね、「無事に元気で通学してね」と話しかけながら、子どもたち一人ひとりのランドセルにマスコットをつけました。

藤元咲枝部長は、「サルは昔から危険が去るといって縁起のよい動物。6年間無事で元気に過ごしてほしい」と話していました。



マスコット

防犯・交通安全の拠点「パトカーの駅」

庄原警察署



パトカーの駅で行われた春の全国交通安全推進大会

子どもの安全を守って、いこうという意識が高まったことで、庄原警察署は昨年9月から全国でも初めてとなる「パトカーの駅」を設置しています。

各小学校の通学路に設けられた「パトカーの駅」では、子どもの下校時間に合わせてパトカーを停車し、地域の防犯団体などと一緒に子どもの見守り活動を続けています。また、警察署と地域住民との情報交換の場として、相談や要望も受け付けています。



子どもの安全に関心をもって!

庄原警察署地域課 檜垣 真 課長

警察では、各学校で子どもたちに防犯教室や交通安全教室を行っていますが、子どもの安全を守るためには、警察のみならず地域の皆さんの活動が大変重要になってきます。

子どもに対する犯罪は、声かけなど小さなことから徐々にエスカレートして、誘拐など大事件に発展することがあります。地域の皆さんの見守り活動は、犯人の子どもに対する「声かけ」を防止することができ、大事件を未然に防ぐための重要な活動です。

今後も、警察ではパトカーの駅を活動拠点として、地域の皆さんとともに子どもの安全活動を行っていきます。地域の子どもの安全を失うことは、財産を失うこと。子どもの安全に関心をもって、できることを実践してください。



パトカーの駅に立つ警官

これまで庄原警察署では、登下校時にパトロールをしていましたが、パトカーが決まった時間に決まった場所にいることで、何か起こったときに子どもたちや住民の皆さんが駆け込むことができます。

最近では、「パトカーの駅」を地域の防犯・交通安全の拠点として、地域住民の集会所や広報発信基地として活用の幅も広がっています。「駐在所には行きにくいけど、パトカーの駅だったら気軽に警察の方と話ができるという方もおられ、コミュニティの場としても活用を図っていきたく」と、庄原警察署では相乗効果を期待しています。

東城の内堀小学校は今年度、親子で地域安全マップづくりに取り組んでいます。

地域安全マップとは、通学路で犯罪が起こりやすい場所を地図にまとめたもので、市内の全小中学校で取り組み、安全教育に活用しています。

昨年度、内堀小学校の児童は、人家がなく人の目が届きにくい場所や、ふだん人がいない倉庫や空き家などを自ら確認し、地域住民にも聞き取りを行って、地域安全マップを作りました。今年度は、それを基に、保護者の目線を加え、さらに充実させていこうとしています。



高橋校長が保護者へ地域安全マップを説明

4月に行われた授業参観では、親子で地域安全マップづくりを学び、次の授業参観までに、親子で通学路を点検することにしました。保護者の増田智正さんは「普段あまり子どもの安全について考えたことがなかったが、何か起こってからでは遅いので、いっきっかけにしたい」と話していました。

高橋俊壮校長は「山間部には、見えにくい場所は至る所にあり、このマップを作ったからといって安全ということではない。大切なのは、知らない人についていかないうちなど、自分で自分の身を守る力を子どもにつけさせること。学校と家庭が連携し、マップづくりなど機会をとらえて安全に対する意識を高めていきたい」と話しています。

6月15日の授業参観では、親子で点検した結果を発表します。



通学路を点検する親子

親子で地域安全マップづくり

庄原市立内堀小学校